

『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』に見られる有賀長伯のテニヲハ観

—「はねてには」の記述を手がかりに—

〔言語の研究〕二号
二〇一六年七月

劉 志 偉

一、はじめに

本稿は有賀長伯が著したとされる『春樹頭秘増抄』(以下、『増抄』)と『和歌八重垣』(以下、『八重垣』)を中心的に取り上げる。「姉小路式」の「はねてには」の項目立てを軸に比較し、長伯の言語意識(テニヲハ観)の一端を明らかにしたい。従来のテニヲハ論研究では長伯のテニヲハ論と言えは『増抄』に代表されるという基本論調があり、『八重垣』におけるテニヲハ関連の記述が『増抄』に比べて量的に少なく、記述内容も簡略であるため、長伯のテニヲハ観を示すものとしてはやや軽視されてきた感がある。しかし、『八重垣』の記述を詳細に確認していくと、長伯による独自のテニヲハ観が顕著に現れているのはむしろ『八重垣』のほうであると考えられるのである。

二、先行研究

二一、旧派テニヲハ論書の流れについて

一般的には、体系的な日本語文法研究が行われるようになったのは、江戸期に入ってからとされている。本居宣長(一七三〇～一八〇二)や富士谷成章(一七三八～一七七九)をはじめとする、江戸期の学者による日本語文法研究が体系性を有するのに対し、そ

れ以前のテニヲハ論書は和歌を研究対象とする歌学の専門書で、和歌作歌上の個々の文法現象について証歌を挙げて説明する傾向がある。文法論としての体系性を欠くため、旧派とも称される。しかし、長きにわたる旧派のテニヲハ論の研究の蓄積なしには、江戸期の飛躍的な日本語文法研究の発展も成し得なかった。日本語文法の研究は、旧派のテニヲハ論書から始まったとも言えるのである。

旧派のテニヲハ論書は大きく二つの系統に分けられる。一つは藤原定家仮託の偽書『手爾葉大概抄』(以下、『大概抄』)と、飯尾宗祇による注釈書『手爾葉大概抄之抄』(以下、『抄之抄』)である。もう一つの系統は著者不詳の『姉小路式』と呼ばれる一群の秘伝書と、その増補系列である。『大概抄』系列の増補本は『抄之抄』のみであるのに対し、『姉小路式』は近世まで種々の増補本が著され、テニヲハ論書の最大勢力を形成していた。代表的なものとしては、『春樹頭秘抄』(以下、『頭秘抄』)と『増抄』が挙げられ、『姉小路式』の直系増補本と増増補本にあたる。⁽³⁾

二二、有賀長伯について

有賀長伯(二六六一～一七三七)は、歌学者として江戸時代前期の二条家歌学の普及に貢献した人物である。テニヲハ論書関係の代表

作の一つに『増抄』があり、「姉小路式」の流れを汲む旧派のテニヲハ論書の最高傑作とも称される。テニヲハ論研究を日本語研究の雛形と見る立場からすれば、長伯は江戸期以前の日本語文法研究史において必ず言及される人物の一人である。また彼の言語意識（テニヲハ観）は江戸期以前の日本語文法研究史において非常に重要である。長伯の言語意識を明らかにするためには、『増抄』のみではなく、同じく彼の著『八重垣』の記述をも考察することが重要である。

二一三、『八重垣』について

『八重垣』についての先行研究は少なく、『八重垣』と『増抄』の成立の前後関係に論点を置いた山田（一九四三）と古田（一九五六）があるほか、佐藤（一九七三、一九八八）による『八重垣』（元禄一三年刊）におけるテニヲハ関連部分の翻刻及びその解説が存在する。山田（一九四三）は長伯が『増抄』の中から秘密にすべき部分、必要でない部分を除いて新研究を加えて『八重垣』を起草したと主張するのに対し、古田（一九五六）は、先に成立した『八重垣』の元となる「有る書」にさらに増補を加えたのが『増抄』であるとすると見解である。また、佐藤（一九七三）には以下の記述がある。

「春樹顕秘増抄」との前後関係も問題となるところであるが、不明である。内容の上からいえば、増抄よりも洗練されている面がうかがえ、増抄よりも後の成立かと思わせる節がないでもない。しかし、早急に判断を下すことは、ここではさしひかえよう。（一四三頁）

このように『八重垣』と『増抄』には共通の文法項目が多く取り扱われており、両書の記述を比較することで、長伯による独自の言

語意識を明らかにすることができる。本稿では更に、長伯の言語意識の変遷を辿ることにより、『八重垣』と『増抄』の成立の前後関係の一端を記述内容の面から呈することを試みる。

三、『増抄』と『八重垣』

本稿は、「姉小路式」の記述を手がかりに、『増抄』と『八重垣』との比較を行い、『大概抄』と『抄之抄』からの影響についても考察する。その際、既存の書を増補するに際しての長伯と『顕秘抄』の著者との研究姿勢の違いをも視野に入りたい。

劉（二〇一二、二四一―二七頁）では、初期のテニヲハ論書（『大概抄』『姉小路式』『抄之抄』）の記述の中で後世を悩ませた難解な用語として「詰め刎ね」と「治定」があることを論じている。本稿では、第一にこの二語が現れるのは「はねてには」の巻であること、第二に『増抄』の記述に比べて『八重垣』において長伯が意図的にこの二つの用語を回避した形跡が窺え、『八重垣』に長伯のテニヲハ観が最も顕著に表れている箇所であること、この二点から「はねてには」の巻を取り上げて比較することとする。

三ー一、テニヲハ諸書における「はねてには」の記述の一覧表

テニヲハ諸書における「はねてには」の巻の記述（下位項目）をまとめたのが表（二）である。「姉小路式」の「はねてにはの事」では証歌五首が挙げられている。表に示した通り、増補本ではさらに多くの証歌が加えられていくが、その増減に関しては特筆すべき点はない。ただし、『顕秘抄』の6にある（★）の歌は長伯のテニヲハ観を探るための重要な鍵となる。詳細は、三ー二（a）で

表(一) テニヲハ論諸書における「はねてには」の巻の記述

[illegible]

述べる。なお、本稿で依拠したテキストについては表の中に示す。

三二、記述内容

三二一、「姉小路式」系列の増補本における下位項目の増減
 テニヲハ論の諸書における「はねてにはの事」⁽⁶⁾の巻の下位分類の

表（二）諸書における「はねてには」の下位分類の項目同士の関係

『大概抄』	『抄之抄』	『姉小路式』	『顕秘抄』	『増抄』	『八重垣』
1○	1○	1	1○	1△	1○
×	×	2	2○	×	×
×	×	3	×	×	×
×	2此詞なく心にもちてはぬる也。	1に含まれている	1に含まれている	2項目統合	2○体系の意図
2○	3○	4	3○		「治定」回避、「留り類」不言及
3○	4○	5	4○	3○	3○
×	×	×	×	4「二字刎ね」	×
×	×	6	5○	5交錯一体（姉小路式の5・6・7に相当）	2へ整理「詰め刎ね」回避
×	×	7	6○		

※論述のために、下位項目については「姉小路式」の記述を手がかりに1～7に区分した。アラビア数字は指示する便宜上付したものである。○はほぼ同様、△は少し異なり、×は該当する記述なしをそれぞれ表す。

項目同士の関係について、表（二）にある記述を省いて表（二）のように示すことができる。

「姉小路式」の記述を基準として比較対照するのは以下の理由による。

イ）最初のテニヲハ論書とされる『大概抄』は六百数十字の漢文体で書かれたため、項目を比較するために便宜的に「姉小路式」を比較の基準とする。

ロ）『大概抄』の注釈書に、宗祇作の『抄之抄』がある。『抄之抄』を比較の基準とすることも可能であるが、その記述は宗祇が「姉小路式」を参考にしたのみならず、宗祇自身のテニヲハ観も含まれているとされていることから、必ずしも『大概抄』の本意とは言い切れない。

ハ）成立の前後関係からして「姉小路式」は『大概抄』に次いだもので、『抄之抄』よりは先の成立とされる。「姉小路式」は『大概抄』の内容との関わりを有しながら中世のテニヲハ論書の最大勢力をなしている。『増抄』と『八重垣』はこの流れを汲む。

「姉小路式」系列の増補本における下位項目の増減については以下の通りである。

『増抄』の4の「二字刎ね」は、長伯のテニヲハ観によって加えられた新たな記述である。後述するように、これは『抄之抄』の4「詰め刎ね」の箇所にある「一字刎ね」を意識したものと思われる。一方、「はねてにはの事」の巻で言及されなくなった項目、他の項目に統合された項目もある。

第一に、「姉小路式」の2「た、しかつらきやしかのうらやなに

は江やなといへるはよひたしのやといひてはねす」は、『顕秘抄』にあつて、『増抄』と『八重垣』にはない。この記述は「姉小路式」の第四卷（「やの字の事」）の内容であり、ここに挙げる必要がないことを意味していよう。『顕秘抄』がこの項目を残しているのは、『顕秘抄』の著者が「姉小路式」を忠実に踏襲する立場を取っているためである。

第二に、「姉小路式」の3「た、うたかふことはうたかひのやにてはぬるなり」が『顕秘抄』増抄『八重垣』ではともになくなってゐる。この箇所は歌中のヤとランとの呼応を言うが、「姉小路式」の1にラン留りと呼応する歌中の「疑ひの言葉」の一つとしてすでにヤを挙げており、一種の重複である。

第三に、「姉小路式」の1の記述の一部である「これらのことはのいらすしてはねられ侍らぬそ」（『抄之抄』の2「此詞なく心にもちてもはぬる也。」に相当）と、「姉小路式」の4「又治定^{ぢやうぢやう}してはぬること見んねんせむけんむこのるひなり」は、『増抄』の2に統合されている。また、後述するように、「八重垣」の2においてはさらにこの『増抄』の2と『増抄』の5を体系づけようとする意図が認められる。

なお、『増抄』の5は「姉小路式」の5・6・7の複合体と見なすことができ、後述する「詰め刎ね」の記述の混乱をもたらす原因となるのである。

三二二二二、「八重垣」における用語の増減——『増抄』との比較——

三二二二二（a）、「詰め刎ね」の回避

宗祇は『抄之抄』において、『大概抄』の「三 詰め刎」を注釈する際に、これが俗に「一字刎ね」と呼ばれていることに言及している。福井（一九六四）による『抄之抄』の各異本の翻刻を確認すると、この「一字刎ね」が「一手爾葉（刎）」の箇所に書かれている異本も存在することが分かる。^⑤

「姉小路式」にも「つめばね」という用語が見られる（根来一九八〇a、七九頁）。が、その記述内容は『抄之抄』のそれと異なっている。『抄之抄』が歌中に「さへ・だに・ぞ・に・て」等おおよそ強調の意をもつ言葉（「押へ字」とランとの呼応を「詰め刎ね」と解釈しているのに対し、「姉小路式」は歌中に呼応する言葉が省略されながら歌末にラン留りとなっている場合（「か、へのかなをりやくしたるらんとまり」）を「詰め刎ね」と述べているのである。

こうした記述の違いがその後の増補本のこの箇所の記述の混乱をもたらす一因となる。というのは、後述するように、『顕秘抄』の著者も『増抄』の著者長伯も、増補を行う際に、『抄之抄』を参考にしていたと考えられるからである。増補本系列における「詰め刎ね」の箇所の記述に関してはかなりの混同が見られ、それが曲解された面もあると言わざるを得ないのである。具体的には、次のような点である。

『顕秘抄』は「姉小路式」の記述を踏襲した上で、次の証歌を挙げている。

〔古春下〕 久かたの光のとけき春の日にしつこ、ろなく花の散

らん（福井一九六四、九三頁）

『顕秘抄』には「此歌の、字はねと云。花のちるらうと云事也」（福井一九六四、九四頁）と記されており、『顕秘抄』の著者が「詰め刎

ね」を「の、字刎ね」と別の名前で呼んでいることが分かる。⁽¹⁰⁾この歌は実は長伯の言語意識を探るための鍵の一つなのである。『増抄』では長伯は、この歌を「口伝の刎ね」の項目の証歌として次のように挙げてゐる。

一、口傳のはね

古今 久かたの光のとけきはるのひにしつ心なく花のちる
らむ

是もつめはねといひ又の、字はねといふ説あり。つめはねの格にていへば春の日といふにもしにてつめ、のもしはねの格にていへば花のといふのもしにてのへたれと、⁽¹¹⁾猶らんの字うきて聞こゆ。是は春の日といふ下へなにとて入て聞ことふかき口傳也。

後撰 秋の、の草はいと、もみえなくにをくしら露を玉と
ぬく覧

千載 戀ぞめし人はかくこそつれなれわかなみたのみ色
かはるらん

右二首も前の久かたの歌と詠格おなじかるへし（福井一九六四、二六頁、下線は筆者による）

ここでいう「口伝の刎ね」とは「姉小路式」を指すものと思われるが、上で述べてきた通り、「詰め刎ね」と混同して解釈されてきた経緯があつたため、長伯は自らの見解をも記している。「詰め刎ね」は『大概抄』と「姉小路式」の両方を含む従来の流れにあるものであり、「の、字刎ね」は『顯秘抄』の説を指している。この二つの説明を批評した上で長伯は、「春の日に」の下に「なにとて」と入れて「読む」⁽¹²⁾べきであると述べている。要するに、歌中に疑いの言

葉は現れないが、読むときには疑いの言葉を入れて（「心ニテウタガフ」⁽¹³⁾）ランで締めくくるといふことである。

「詰め刎ね」という用語には異なった二種類の見解があつた。また、増補本系列においては、「詰め刎ね」が「口伝の刎ね」であるゆえに「一字刎ね」の、字刎ね」等複数の別称を有する結果となり、後世に至つては解釈できない、または曲解されるような事態となつてしまつてゐるのである。⁽¹⁴⁾『八重垣』に「詰め刎ね」という用語が使われてゐないのは、長伯がその経緯と事態を看破し、意図的に回避した可能性があるからである。『八重垣』における、「久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく」という証歌の出現箇所を確認しても、そのような長伯の意図があつたことが読み取れる。この歌は『八重垣』の2「又前のことく上にうたがひの字なくてはねたるもあり。」の証歌の一首として登場しており、「上に疑ひの字なくて刎ねたる」とは、歌中に疑いの言葉がない場合のランとの呼応を指している。

同 ともものり

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん
是は春の日といふ下へいかと心をそへて聞也。口伝也。（佐藤一九八八、八三頁）

このように、テニヲハ論書には多くの口伝が含まれていたがゆえに、その内実を知ることができず、項目や記述の増補が行われていくうちに、様々な曲解が生まれていつたのである。結局、後世に至つてはますます解釈が難解な箇所になつてしまつたのである。この箇所に限つて言えば、本来「心にて疑う」のような、単なる「疑ひのことば」の有無の説明に用いるべき歌が、「詰め刎ね」の箇所に混用されてしまつてゐる。これらの用語が混用されている事実に基づ

いた長伯が『八重垣』において実質同じ内容（疑いの言葉に伴わずランと呼応するタイプ）を述べている『増抄』の2と5を『八重垣』の2に統合させたのではないかと考えられるのである。

三―二―二（b）、「治定」の回避

「姉小路式」の4の「治定してはぬること」については『顯秘抄』がそれを完全に踏襲するのみであるのに対し、『増抄』にはさらに「是は上にうたかひのかな、くてはぬる也。」（福井一九六四、一二四頁）との文言が加えられている。この文言は『抄之抄』の「此詞なく心にもちてはぬる也。」（西田一九七九、二八頁）に相通ずるが、もともと「姉小路式」の1に「これらのことはいらすしてははねられ侍らぬぞ」（根来一九八〇a、七八頁）との記述があることから、これを「姉小路式」の4に配置しなおしたとも考えられる。『増抄』のこの箇所の記述を『八重垣』におけるそれと比較した場合、以下の二点の違いがあることに気づかされる。

（Ⅰ）「治定」という用語が用いられていない。

（Ⅱ）留りとして挙げられた「てん・ねん・せん・みむ・こむ・なん・けんの類」の記述がなくなっている。

（Ⅰ）の「治定」はテニヲハ論における難解な用語の一つで、概ね「非疑ひの言葉」を指す（劉二〇一二、二七頁）。三―二―二（a）で述べた通り、『八重垣』の2と3はそれぞれ歌中に疑いの言葉を伴わない場合と強調系の言葉を伴う場合を指している。非強調系と強調系との違いはあるものの、両者はともに「非疑ひの言葉」に属するものであるという捉え方も可能である。従って、「治定」という用語が用いられなかったことは、長伯による意図的な回避である

と考えられる。

一方、（Ⅱ）についても、『増抄』が「姉小路式」系列の直系増補本という性格を脱していないのに対し、『八重垣』の2と3は歌中に疑いの言葉を伴わない場合で非強調系なのか、「をさへ」つまり強調系の言葉を伴う場合なのかで区別しており、もはやこれらに呼応する歌末の留りである「てん・ねん・せん・みむ・こむ・なん・けんの類」についてわざわざ言及する必要がないことから考えても、首肯できる処置であると言える。

四、「八重垣」と『抄之抄』の関係性

『八重垣』の「9―2らん留り」については表（一）に示した通り、1・2・3の三つから構成されている。具体的には、ランと疑いのことばとの呼応関係を軸に、疑いのことばを有する場合（『八重垣』の1）とそうでない場合に分けられる。後者の歌中に疑いのことばを伴わない場合はさらに、「上にうたがひの字なくてはねたる」（『八重垣』の2）と「をさへつめてはぬるらん」（『八重垣』の3）とに二分されている。『八重垣』の3の「をさへつめてはぬるらん」は『八重垣』の2のように「上にうたがひの字なくて」という明確な表現がないので、二項対立的な表現による整理は行っていないが、実際は歌中における疑いの言葉の有無という二項対立的な整理になっている。この構成は「姉小路式」とは別の流れを汲む『抄之抄』寄りのものもと考えられる。なぜならば宗祇の「此詞なく心にもちてはぬる也。」という注釈は、『大概抄』の「二 手爾葉」と「三 詰刎」とを総記した文言であるとの見方も成り立つからである。

なお、長伯が『抄之抄』を読んでいたことは次の点から明らかで

である。以下いくつかの証拠を挙げる。

(i) 『抄之抄』の3と『増抄』の2に挙げられている留りのうち、

「てん」はこの二書に見られる。

(ii) 『増抄』の3に「是をつめはねという習ひ也。」という記述は『抄之抄』の4を指している。

(iii) このほか、『増抄』独自の項目「二字刎ね」は、長伯が『抄之抄』の「詰め刎ね」の箇所にある「一字刎ね」を意識したものの可能性が高い。

五、『顕秘抄』の著者と長伯の増補姿勢の相違について

—「はねてにはの事」の巻を手がかりに—

『顕秘抄』と『増抄』はともに、「姉小路式」の直系増補本系列の書として知られ、一般的に『増抄』は『顕秘抄』の項目を増補したものとされている。しかし、両書に見られる増補の姿勢は大きく異なっており、両書を扱う際には十分な注意を要しなければならない。

『顕秘抄』の著者は「姉小路式」の「第十一巻」(福井一九六四、八二—八三頁)を「第十二 哉と云手爾葉の事」(福井一九六四、一〇六頁)と「第二十一 てにをはしな／＼ある事」(福井一九六四、一一二頁)とに分けて記述しているといったごく一部の違いはあるが、「姉小路式」の記述をほぼ忠実に踏襲する姿勢にある。『顕秘抄』の著者は、内容的にも歌道に抜きんでた人物とは思われず、書誌学上の定説とも一致するが、この書が細川幽斎の真作とは考えにくい。その最たる証拠としては、『悦目抄』等の内容を取り入れ、「第十八 たすけ字の事」(福井一九六四、一一〇頁)をたてていることが挙げられる⁽¹⁸⁾。これはテニヲハ論研究においては「一時的な衰退とも言える記述

であり、後に長伯に修正されることとなるのである。⁽¹⁹⁾

一方『春樹顕秘増抄』は、その名の通り、増補本であるがゆえに、「姉小路式」の流れを汲んでいる。ただし、全体の記述において、長伯は独自のテニヲハ観を取り入れつつ、増補を行ったことは間違いない。⁽²⁰⁾ 日本語文法研究史において看過できないような次の指摘がある。『増抄』の5にある「又上にやとうたかひのか、へありて下にうたかひのをさへなきもかたうたかひ也。」という記述である。上に「かかへ」、下に「をさへ」という捉え方は、係り結びの現象を捉えようとしたものである。以下、「はねてにはの条々」に限定して、長伯のテニヲハ観を示す記述を提示する。⁽²¹⁾

(1) 『増抄』の2において「てん・ねん・せん・みむ・こむ・なん・けん」等留りを列挙した後、「是は結句にかきらす五句の中いつれの句にもあり。」という記述が見られる。ここでは留りは歌末のみならず、歌中の各句の句末をも指すことについて触れられている。

(2) 『増抄』の2に「治定してはぬる事」の留りとして、『抄之抄』の「てん」を加えたほか、「こむ」を追加しているが、旧派テニヲハ論書の形式主義の域を出ていない。また、『増抄』の3の歌中に現れる「か、へのかな」として従来のものに「へ」と「も」を加えていることも同様である。時代の限界であると言わざるを得ない。

(3) 三一二—二(a)で既述した通り、『増抄』の5は『顕秘抄』由来の「の、字刎ね」を「のへてはぬる事」の項目で取り上げ、「詰め刎ね」との関係性を批評した上で自らの見解を述べた。このほか、従来項目の見出しでしかなかった「かた

うたかひ」もろうたかひ」についても自らの解釈をしている。

(4) 『増抄』の5において「らん」を中心とする推量系関連の助動詞として従来取り上げられてきた「あらぬ」「まし」「ぬらん」を外している。⁽²³⁾

『増抄』の記述において、従来の記述における誤りや読解不可能な箇所に対して、長伯が自らのテニヲハ観のもと、懐疑的な視点で増補を行ったと認められる反面、秘伝であるがゆえに解説不可能な箇所や、見抜けなかった箇所も存在する。「姉小路式」の直系増補本という制約は勿論重要な一因であるが、旧派のテニヲハ論書の記述内容の傾向である「素材主義から文論への本格的な変革」(内田一九九七、三六〇三八頁)は、梶井道敏(一七二五―一七八五)による『てには綱引綱』という過渡的な書を経て、本居宣長や富士谷成章以降の「国語」研究を待たなければならぬ。⁽²⁴⁾

このように、『増抄』には発展が見られる一方、旧派のテニヲハ論書の抱える限界から脱しきれない一面が見られるのである。

六、結びにかえて

本稿は、「姉小路式」系列でいう第一巻に相当する「はねてにはの事」に限定し、同じく長伯が著したとされる『増抄』と『八重垣』を中心的に取り上げ、長伯の言語意識(テニヲハ観)の一端を明らかにした。『増抄』は「姉小路式」の直系増補本であるゆえ、長伯は『抄之抄』の影響を受けながらさらに自らのテニヲハ観を取り入れてはいるものの、祖説の「姉小路式」の枠の中での増補作業しか展開できなかったと考えられる。一方、『八重垣』においては、長伯は「姉小路式」とは別の流れを汲む『抄之抄』の記述を参照した

上で、より洗練された記述がなされている。項目の構成のみならず、これまで考察してきたように、細かい箇所の記述内容に関しても『八重垣』のほうが『増抄』よりも記述の上で優れたところが多い。『八重垣』のほうがより全面的に長伯の言語意識(テニヲハ観)を表していると思われるべきである。⁽²⁵⁾

無論、『増抄』と『八重垣』の成立関係及び記述内容についてはこの二書の編纂目的も視野に入れなければならない。つまり、『増抄』は非公開の「相伝の書」(古田一九五六、二五頁)であるのに対し、『八重垣』は公刊された初学の啓蒙書で歌学辞書の性格を持つ。この点を取り入れた整合的な説明が求められるが、それをさらなる今後の課題としたい。

注

(1) 「姉小路式」と呼ばれる一群には姉小路式と題する写本は存在しないため、ここでは「」を用いて表記する。なお、本稿では「姉小路式」として、重要な異本『手耳葉口伝』(根来一九八〇a)を主に参照する。

(2) 『八重垣』には句の次第・会席の作法等複数の巻が含まれており、テキスト全体の量としては『増抄』よりはるかに多い。ここでは比較対象の「テニヲハ関係部分」のみを指す。

(3) 細川幽斎の奥書を有する異本もあるが、定説(井上一九六四、二二頁)では著者不詳。

(4) 他の傍流の増補本については、テニハ研究会(二〇〇三)を参照されたい。

(5) 歌学と語学の違いについては笹月(一九三九)、川平(一九九八)

等の先行研究がある。本稿は、テニヲハ研究の蓄積も日本語文法研究意識史の一環と考え、日本語文法研究史を広義的に捉える。

- (6) 「はねてには」は概ね歌末または句末に現れる助動詞の「らん」及びそれに関連するものを指すが、以下の記述においては「ラン」と表記する。

- (7) 井上(一九六四、一六頁)執筆の「解題」を参照されたい。

- (8) 『顕秘抄』は「姉小路式」を敷衍しており、全く同じ構成である。

- (9) 「(b 本以上) 割注ヲ次ノ詰劄ノ所ニ出ス」(福井一九六四、五四頁)。

- (10) 長伯は『増抄』において『顕秘抄』の著者の言う「の、字劄ね」を「のへてはねる事」(福井一九六四、一二五―二六頁、下線は筆者による)の項目として取り上げている。「のへてはねる事」は「姉小路式」にもある項目であるが、口伝とされていたため具体的な記述はない。『増抄』におけるこの記述は長伯のテニヲハ観の一つと見ることが出来る。

一、のへてはねる事 これをの、字はねといふ習ひ也。
の、字にてのへてはねる也。

拾遺愚草 今とはて驚さそふはなのかにあふ坂山の

まつかすむらん

新葉 我かたにもしほたるともしらてこそこと

うら人のみるめかるらん

- (11) 「のへ」については劉(二〇一二、五一―五六頁)を参照されたい。

- (12) 川平(一九九八)は、詠歌の立場からすれば「詠む」であり、解釈する立場の場合は「読む」であると言及している。テニヲハ論書を解説する際には極めて示唆的である。

- (13) 『顕秘抄』(福井一九六四、九四頁)に「私ニ云又心ニテウタカフ」という朱書きが確認できる。『顕秘抄』の著者によるものかどうかについては不詳である。

- (14) 大秦(二〇〇六、三四頁)も増補本系列の著者たちが「姉小路式」の記述を忠実に依拠するあまり誤解したことがあると指摘している。

- (15) 『増抄』の5にある「一、かたうたかひの事 是は上^レにや・か などのうたかひのか、へなくてらんとはぬる也。詠格は

前のつめはねと証歌おなし。又上にやとうたかひのか、へありて下にうたかひのをさへなきもかたうたかひ也。」の下線部は、「片疑」の一種を説明しているが、『増抄』の2と重複している。こうした重複はほかの箇所にも見られる。例えば、『増抄』の5の「又をさへつめていふあり。是又らんのをさへに同し。不及証歌。」は『増抄』の3と重複している。これらの重複も『八重垣』において長伯が項目の整理を行ったことの一因として考えられる。

- (16) 「をさへつめて」は概ね「強調」の意の表現を指す。

- (17) このほか、『抄之抄』の4を参照したと思われるが、「か、への假名」に「さへ」と「だに」を加えていること、ランに関連する留りとして『顕秘抄』の5に新たに「ぬらん」を加えていること等挙げられる。

- (18) 井上(一九六四、二二頁)を参照されたい。

(19) 劉(二〇一二、一四二頁)を参照されたい。

(20) この姿勢は、宗祇が『大概抄』を注釈する際のそれと共通している。つまり、宗祇は自らのテニヲハ観を取り入れつつ、『大概抄』の注釈をしたのである。

(21) 仁田(一九八四)では、文法的な術語として「係り」と「結び」をはじめて用いた人物は本居宣長であり、「係結び」という熟した語を最初に用いたのは萩原広道の『てにをは係辞弁』においてであると述べている。なお、『大概抄』に不完全ながら、係り結び現象についての言及がある。また、初期のテニヲハ論に先行して、連歌論書にもそれが確認できる。詳しくは劉(二〇一二)を参照されたい。

(22) 従来 of 誤りを改めようとした箇所として「休めの類」を挙げることできる。劉(二〇一二、一四二頁)を参照のこと。

(23) 「まし」を外した理由については不詳であるが、「あらぬ」に関しては佐藤(一九九四a、七頁)が指摘の通り、推量系関連の助動詞のこの箇所に挙げられているのは奇妙であり、長伯のテニヲハ観は当を得ている。また、「ぬらん」については、この箇所はランに関する記述箇所であり、わざわざ挙げる必要がないためか。ただ、旧派のテニヲハ論書では形態的にテニヲハを捉えることが一般的であるという特徴を有し、「打ち消しの助動詞+ラン」の例として挙げたとしても、決して不思議ではない。従って、長伯の理解は場当たり的な面もあり、やはり江戸期以降の助詞・助動詞研究への過渡的なものという評価しか得られないのである。

(24) 「さへ」「だに」の品詞分類の意識がまだ正確に成立していない

かったことについても同じである。

(25) 本稿は「はねてには」についてのみ比較しているため、『八重垣』が『増抄』より後の成立であることを部分的な結論とし、全体的な評価に関してはほかの巻における比較と分析作業を待つこととする。

参考文献

井上誠之助(一九六四)「解題」福井久蔵編『国語学大系―手爾波一

―』白帝社

上野洋三(一九七七)「有賀長伯の出版活動」『近世文芸』二七・

二八、日本近世文学会笠間書院

内田賢徳(一九九七)「中・近世日本法学の再評価と体系化」『平成

八年度科学研究費補助金基盤研究(c)(二)研究成果報告書』

大泉一浩(二〇〇六)『《文藝学会公開講演会・筆録》テニヲハ研究

史の一端』『文藝論叢』六七、大谷大学文芸学会

川平ひとし(一九九八)「歌学と語学―創作論の枠とその帰趨―」『日

本語学』一七の六

日下幸男(一九八六)「有賀長伯年譜稿―地下一流の古今伝授―」『学

大國文』二九、大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文

化講座

小柳智一(二〇一一)「『手爾葉大概抄』読解―「手爾葉」と「詞」―」

釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房

小柳智一(二〇一三)「たましゐを入れべきにては―副助詞論の系譜

―』『日本語の研究』九の二、日本語学会

笹月清美（一九三九）「中世歌学におけるテニヲハ論」『文学』七の

一〇

佐藤宣男（一九七三）『和歌八重垣』と「てにをは」『藤女子大学・

藤女子短期大学紀要（第一部）一一

佐藤宣男（一九八八）「翻刻和歌八重垣巻二―テニヲハ関係部分につ

いて―」『藤女子大学国文学雑誌』二三

佐藤宣男（一九九四a）『手爾葉大概抄』と姉小路式Ⅰ―中世歌学

におけるテニハの扱い―」『福島大学教育学部論集（人文科学）』

五五

佐藤宣男（一九九四b）『手爾葉大概抄』と姉小路式Ⅱ―中世歌学

におけるテニハの扱い―」『福島大学教育学部論集（人文科学）』

五六

佐藤宣男（一九九五a）「姉小路式の系譜―『春樹頭秘抄』における

テニヲハ理解の諸相―」『福島大学教育学部論集（人文科学）』

五七

佐藤宣男（一九九五b）『春樹頭秘増抄』におけるテニヲハの諸相Ⅰ―

『福島大学教育学部論集（人文科学）』五八

佐藤宣男（一九九五c）『春樹頭秘増抄』におけるテニヲハの諸相Ⅱ―

『福島大学教育学部論集（人文科学）』五九

テニハ研究会編（二〇〇三）『テニハ秘伝の研究』勉誠出版

西田直敏（一九七九）『資料日本文法研究史』桜楓社

仁田義雄（一九八四）「係結びについて」『研究資料日本文法五 助辞

篇（一）助詞』明治書院

仁田義雄（一九八九）「第十章 日本語学史」加藤彰彦他編『日本語

概説』桜楓社

根上剛士（二〇〇四）『近世前期のてにをは書研究』風間書房

根来司解説（一九八〇a）『手耳葉口伝（彰考館文庫蔵）』和泉書院

根来司（一九八〇b）『てにをは研究史―てにをは秘伝書を中心とし

て―』明治書院

福井久蔵編（一九六四）『国語学大系―手爾波―』白帝社

古田東朔（一九五六）『和歌八重垣』をめぐって『文芸と思想』

一二、福岡女子大学文学部

松野陽一（一九八〇）『北海学園北駕文庫文の亨弁注（問答）翻刻』江

戸堂上派歌人資料 習古庵亨弁著作集』新典社

松野陽一（二〇〇二）『江戸堂上派和歌資料考―亨弁と石野広通―』

『国文学研究資料館紀要』二八、国文学研究資料館

馬淵和夫・出雲朝子（二〇〇七）『国語学史日本人の言語研究の歴史

（新装版）』笠間書院

山田孝雄（一九四三）『国語学史』寶文館

劉志偉（二〇一二）『姉小路式』テニヲハ論の研究（プリミエ・コ

レクション一二）、京都大学学術出版会

劉志偉（二〇一三）『テニヲハ研究史の再整理』都大論究』五〇、東

京都立大学国語国文学会

付記

本稿は科学研究費助成事業若手研究（B）「有賀長伯のテニヲハ
観に関する研究―『和歌八重垣』と『春樹頭秘増抄』を手がかり
に―」課題番号8670164」と若手研究（B）「日本語文法研究史
における『春樹頭秘抄』と『春樹頭秘増抄』の位置づけについて」

(課題番号24720208)の助成による研究成果の一部である。

本稿は本誌に投稿する前に一度ある学会誌に投稿したことがある。その際に匿名の査読者から多くの貴重なご教示を頂いた。その一部を取り入れて修正を行った。また、本誌においても匿名の査読者の皆様に多くの貴重なご意見を賜った。ここに記して厚く感謝を申し上げます。このほか、論文の執筆にあたり、中嶋徹氏のご協力を頂いた。併せて感謝の意を表す。

(りゅう しい・首都大学東京)